

グローバルゼーションとデモクラシーについて 研究ノート（１）

平田 忠輔

山梨県立女子短期大学 国際教養科

On Democracy in the age of Globalization (1)

Tadasuke HIRATA

Yamanashi Women's Junior College

【目 次】

1. はじめに
2. グローバル化とは何か
 - 2-1 グローバル化へのアプローチ（以上、本号）
 - 2-2 グローバル化の諸帰結
3. 民主主義の再検討
 - 3-1 民主主義とアイデンティティ
 - 3-2 民主主義と国家・市民社会・市場
4. まとめ

Key words : グローバル化(グローバルゼーション, globalization), 地域主義(リージョナリズム, regionalism), 民主主義(デモクラシー, democracy), 国家(state), 国民国家(nation-state), 国民(nation), 市民権(citizenship), 市民社会(civil society), 市場(market), 近代性(modernity), ガヴァナンス(governance), 政府(government)

1. はじめに

現在、グローバル化の語はおおよそあらゆる問題に答えてくれる便利な「慣用句」となっている。だが、グローバル化とは何かという問いに対しては様々な答えが出されている。グローバル化は経済的なこととして取り上げられることが多いが、それが経済的次元に限られないとすると、その他の次元とどのように関連しているのか。そういうことを考えると、グローバル化と民主主義というのはあまりに大きなテーマであろう。小論で企てるには大胆な試みといわざるをえないかもしれない。多くの著書がそれに触れてはいるが、本格的検討はこれからというのもそこから生じているのであろう。

グローバル化と同様に民主主義についても古くから論争がある。民主主義体制という名で一括されてもその実情が異なっているのは言うまでもな

い。しかしこれも言い尽されてはいるが、現在民主主義体制を名のらない国家はない。とするとグローバル化と民主主義というテーマは、むしろ経験的・実証的な研究を積み重ねる必要があるということになる。換言すれば現在の研究状況からみて検討に値するテーマとは言えないのかもしれない。しかし理論的反省が不必要だということにはならないであろうし、現にそれは行われている。例えば、市民権(citizenship)の再検討はその好例であろう。市民とは誰か。人の移動の規模から言って、市民＝国民の概念は再検討されなければならない。またその権利には何が含められるのか。(包摂と排除としての)市民権の新しい定義が試みられている。S・ストレンジが言うように、グローバル化の問題だけでなく、従来の国際関係論はこの問題をほとんど取り扱えない¹⁾。

むろんこの小論で扱うのは、グローバル化と民

主義というテーマの一部分に過ぎない。出発点にあるのは、両者の間には緊張関係があり、この緊張関係が解消されることはないであろうという予測である。あるいはそもそもC・ムフが指摘したように、民主主義自体が緊張をはらんだものであるということから検討を始めなければならないのかもしれない。彼女が繰り返し述べているように、民主主義がその成立に「われわれ」と「彼ら」の分割を必要とするなら、市民権の定義にかかわる問題は近代民主主義の成立に伴う問題だということができる²⁾。とするとグローバル化によって起こったことは民主主義の問題性のより明確化に過ぎないということもできる。

民主主義が分割を必要とするという意味では、グローバル化と民主主義の関係とはナショナリズムと民主主義の関係という古くからのテーマの変奏である。しかし、グローバル化が進むに伴って従来とは異なった民主主義の問題性を考えざるを得なくなったのも確かである。この論点を、グローバル化がデモクラシーの実現にどのような影響をおよぼすかという問いをめぐって、いかなる問いと答えが提示されているかを検討することに、小論の目的はある。問われているのは、民主主義の変容なのか民主主義の危機なのか。

W・キムリカのように、グローバル化と民主主義の緊張という問いをそれほど重視しない論者もいる³⁾、グローバル化に関してもその進行を疑問視する論者もいる。グローバル化に関してはすぐ後に検討することになるので、テーマの意味をもう少し説明しておこう。元来、少なくとも第二次世界大戦後には民主主義は国民国家の領域内に完結していた。井口孝が述べているように、国民国家、国民経済、国内統治は三位一体として考えられていた⁴⁾。他方、国家間の関係としての国際体制は「自然」と考えられていた。国際的な民主主義(もしあるとすれば)を考える場合にも国家間の関係として考えられたと言ってよい。しかし、「国民国家のゆらぎ」が口にされたのはこの三位一体がゆらいだということである。この点はグローバル化を検討する際に述べるが、ここで国家についての内部構造を簡単に提示しておこう。

進藤榮一はかつて、西洋中心的モデルからの転換を提唱して、国民国家間の関係としての国際関係をビリヤード・モデルと述べたことがあるが、それを借用するとビリヤードの〈玉〉は国民国家

である⁵⁾。その内部を構成する要素は政府・市民社会・市場・国民・その他の制度や観念である。その要素のうち、政府・市場・市民社会はそれぞれを頂点とする三角形をなし、先に述べた三位一体をも示している。この三角形の各頂点は近代の理念である、友愛(政府・国家)・自由(市場)・平等(市民社会)を価値とする。これらの諸価値は普遍的であるが、歴史的には実現性は国家の内部に限定されており、国民という円がこの三角形に外接していた。他方、この三角形は三角錐の底面となっており、残り1つの頂点は民主主義を表す。民主主義という観念も先の近代的価値と同様に普遍的であり、境界をもたないが、そのおよぼ範囲は(アメリカの理念を除いて)国内に限られると考えられた。民主主義と政府(国家)・市場・市民社会の結びつき方は、民主主義にその国家に特有な政治文化的特徴を与える。底面の国民と上面の民主主義という円を結ぶ図形は円柱をなす。円柱の両底面は同じ面積であるから、民主主義の範囲と国民の範囲は同じである。

言いかえれば、民主主義は一国民主義である。先に述べたように、グローバル化と民主主義の関係とはナショナリズムと民主主義の関係という古くからのテーマの変奏でもあり、その古くからの問いがグローバル化の進行に伴って問題となるのは、この内部構造が変容したということである。〈玉〉の内部構造が歪みをきたしたということである。したがって変容しているのは文化と呼ばれている領域も同様である。

A・パオリニは、アフリカのグローバル化についての三つの立場を批判的に紹介した後、近代化の唯物論派と主体性・文化性に重要な場所を認めるポストモダン派の「中間的な道」とをとるという⁶⁾。彼の言う「中間的な道」というのは、二つのアプローチを結びつけると言うことであろう。それは、N・フレーザーの理論的試みとも一致する。彼女は政治に二つの軸を設定した。それは、政治経済の軸と社会文化の軸である。政治経済の軸については特に説明を要しないであろうが、社会文化の軸には、差異とアイデンティティの問題が中心をなしている。二つの軸は再分配の政治と承認の政治といってもよい⁷⁾。従来の政治では再分配の政治が中心であった。後者の軸が問題にされなかったのは、配分問題、つまり階級的な問題が政治の中心だったからである。しかしグローバル

化は、多文化主義、ポストコロニアリズム、ポスト構造主義と絡んで、理論的な次元では文化の問題を前景化した。文化はすぐさま政治的であるわけではないが、政治的になりうる／される。言いかえれば文化はつねに非政治的であるわけではない。今日、政治は政治経済と社会文化の二つの軸の交差で営まれることがより明瞭になった。グローバル化の政治経済学と文化政治学の二つの軸はどのように絡み合っているか考えてみたい。上野俊哉が空間論のタイプを分類した時の整理を借りると、ミクロ／マクロ次元の双方に敏感で、「グローバルな社会と経済における空間の編成について論じると同時に、対抗文化や(新)社会運動におけるミクロな空間の設定」について考えるということである⁸⁾。

この小論はむろん明確な答えを提示するつもりはないし、グローバル化に伴う民主主義のモデルを提示するつもりもない。ただ次のことには注意しておこう。グローバル化と結びつけて民主主義が論じられるときには、その多層性の必要が主張される。あるいは、「グローバル化は、国家の内部と国家間双方での、権力の二重の民主主義化」を必要とするといわれる⁹⁾。それはその通りなのだが、いずれも明確さを欠いている。この点を明確にしたいというのは小論の目指すところである。しかしそれ以上ではない。付け加えればそれは理

論的な課題であるだけではない。理論的問題がいつもそうであるように、それは実践的な問題でもある。民主主義という近代に再編成された制度や理念を次の時代にどのような形で譲り渡すことができるのか。それは、日本について言えば、姜尚中が丸山眞男を主題として論じた際に提起したこと、「冷戦と重なり合う戦後体制としての戦後デモクラシー」¹⁰⁾にかわってどのような体制を創ることかという問題である。

小論ではまずグローバル化とは何かを検討する。次にどのような民主主義が求められるべきかを検討する。なお研究ノートという性格からも、またテーマからも、最初の章から次の章へと直線的に書き進めることはできない。既に検討した点に戻ることになるだろう。なお、民主主義とは何かという点に関しても本格的に言及するのは後のこととして、ここでは暫定的に、民主主義を政策決定過程以上のことを意味するというを指摘しておこう。中心となるのは「国民の意思」による決定の正統化という点である。しかし、述べたように一国民民主主義はゆらいでいる。先に市民権に触れたが、代議制(representative)に関しても検討のし直しが必要であろう。代議制民主主義とはそこにいる(present)誰を代表するのか(represent)。「国民の意思による正統化」というからには、民主主義は国民意識(national identity)を必要とするのか。

注

- 1) スーザン・ストレンジ(桜井訳)(1998):『国家の退場』, 岩波書店.
- 2) Chantal Mouffe (2000) : *The Democratic Paradox*, p.5, pp.42-44, Verso.
- 3) Will Kymlicka (2001) : *Politics in the Vernacular : Nationalism, Multiculturalism and Citizenship*, pp.319-322, Oxford University Press.
- 4) 井口孝他(1999):『現代民主主義の変容』, 5頁, 有斐閣.
- 5) ローランド・ロバートソンも同様のモデルを紹介している. ロバートソン(阿部 訳)(1997):『グローバリゼーション』, 69頁, 東京大学出版会.
- 6) Albert J. Paolini(1999): *Navigating Modernity: Postcolonialism, Identity, and international Relations*, pp.159-164, Lynne Rienner Publishers.
- 7) Nancy Frazer (1997) : *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*, ch.1, Routledge.
- 8) 上野俊哉(1999):「空間論的転回、その後」, 『現代思想: 変容する空間』, No.27-13, 74頁, 青土社.
- 9) Pierre Schori, ed. (1998) : *Understanding Globalization: The Nation-State, Democracy and Economic Policies in the New Epoch*, p.23, Swedish Ministry for Foreign Affairs. キムリカはこの二重の課題を否定する. 彼の場合には民主化は国際的な課題ではない. なお, この小論では, 千葉眞の試みとは違って, 民主主義とデモクラシーを交換可能なものと用いることを付言しておく. 千葉眞(1995):『ラディカル・デモクラシーの地平』, 新評論.
- 10) 姜尚中(1999):「国民国家の地政学とナショナリズム」, 『現代思想: 変容する空間』前掲.

2. グローバル化とは何か

2-1 グローバル化へのアプローチ

一つの問いは別の問いを排除したり、隠したりする。グローバル化とは何か、どのような世界が出現するのか、われわれはどのような時代を経験しているのかという問いはその典型であるかもしれない。グローバル化という言葉説を鋭く批判する著はそのことを強く意識させる。たとえば、J・グレイはグローバル化＝地球的な自由市場化を「啓蒙主義」として規範的に批判する¹⁾。パオリニは、グローバル化＝西洋化を警戒し、他者に魅力を感じることは「西洋の自己イメージとヘゲモニーの再編成」かもしれないと言う。そこでは、途上国の「特殊なものは認識されるかもしれないが、ふたたび普遍的なものとしての西洋が参照点である」²⁾。D・ハーヴェイも同様の認識を示している。彼は、グローバル化の用語が新植民地主義に代わったこと自体が「ブルジョア権力の剥き出しの行使」を現していると捉える。彼によると、われわれは、グローバル化という万能で同質的な過程の、抑圧的で閉鎖的言語の使用から解放されるべきである。

ハーヴェイのグローバル化論批判は以下のように続く。グローバル化と言えば必ず言及される金融の脱規制は、スタグフレーションへの対応として1970年代にアメリカで始まったが、それは慎重な戦略と言うよりは現実への譲歩であった。ここで起こったのは、「合衆国によってコントロールされていた階層的に組織化されたグローバルなシステムから、もっと脱中心的で、市場を通じて調整され、資本主義の金融的条件をさらに揮発的にする別のグローバルシステムへの転換である」。そのレトリックはグローバル化を「長所(virtue)」として促進するものであった。そして、「国際的金融のシステムでの必要な調整を最大限利用するための促進的手品以上のものではないのに、グローバル化を何か新しいことと信じるよう甘言を用いたのは金融的報道であった」。ハーヴェイは、「グローバル化」概念から「不均等な地理的發展」概念への転換を提唱する。

こうしてグローバル化という語の使用には慎重でなければならない。その点を確認した上で、グローバル化とは何かという問いをふたたび立ててみよう。それにはグローバル化の経済的側面、文化のグローバルな浸透、トランスナショナルな権

力主体などがどのように編成されているのか、グローバル化の過程で国民国家はどのように相対化されるかなどの問いが含まれる。確かに、グローバル化についての「理論化はまだ始まったばかりである」³⁾が、民主主義の課題を考える上でもこれらの検討は欠かせない。

ハーヴェイもグローバル化の語を完全に拒否するのではない。なぜなら、その語に新しい点があるとする、「それは空間の資本主義的生産の同じ過程の新しい局面である」ということを示しているからだ。彼が繰り返し述べているように、空間の生産は資本蓄積のダイナミクスと階級闘争の地政学にとって根本的で不可欠であり、地理的次元を無視すると、労働者階級を「自然の地理的実体」であるかのように扱うことになる⁴⁾。ここで提起されているグローバル化と空間という問題は後に検討しなければならない。なぜなら吉見俊哉が端的に指摘しているように、「グローバル化は根本的に空間的な現象である」からである⁵⁾。

J・ミッテルマンによれば、グローバル化の概念は二つのカテゴリーをめぐって形成されている。すなわち、第一は、「相互連関ないし相互依存の増大、トランスナショナルなフローの興隆、諸過程の激化など世界が若干の局面において単一の場になりつつあることを指摘」するものである。第二のそれは、「時空の圧縮を強調する」ものである⁶⁾。この整理を援用すると、J・トムリンソンは第一グループに属する。彼はグローバル化を、近代文化の中心に求め、「近代の社会生活の特徴づける相互結合性と相互依存性のネットワークの急速な発展と果てしない緻密化を意味する」と定義している。その結果は、個人と集団の社会的・制度的関係から、商品・情報・人材・慣習の「流れ」の増大となっている。その原因やその意味を理解することが研究の課題というわけである⁷⁾。

たびたび引用したハーヴェイは第二グループを形成する典型であろう⁸⁾。A・ギデンズは、グローバル化の力を近代性(modernity)に求め、近代性の力の源泉を、時間と空間の分離、組織の離床(disembedding)、知識の反省的使用(reflexive appropriation)においた⁹⁾。R・ロバートソンはグローバル化は近代性に先行すると述べて、ギデンズを批判するが、定義ではギデンズと同じく「時間と空間の圧縮」を中心とする。彼はグローバル化を「世界の圧縮と、一つの全体としての世界と

いう意識の増大の双方に言及する」と述べている。あるいは、ギデンズに言及して(この点ではトムリンソンを加えてもいが)、彼はグローバル化を「全体としての世界の縮小」、すなわち「国を超えるとともに諸国の間で相互依存関係の度をますます増大させる」ことと定義する。

ロバートソンはグローバル化を経済的次元でだけ捉えることに反対し、特に文化の次元を挙げる。彼によると、文化とは「われわれが本質的に挑戦できる現象、そして計画的に構築し、あるいは再構築できる現象」である¹⁰⁾。しかし彼の論述にはその言と違って、「アイデンティティの概念に、緊密に結びつけられる」¹¹⁾ 文化をめぐる緊張関係への考慮は欠落していると言ってよい。これを考察するためには、A・アパデュライの言うように、文化を「ハビトゥスではなく…、意識的選択や正当化や表象の場」と捉えるべきではないか¹²⁾。その時、「文化的再生産の作業は、…もっとも親密な場においてさえ、政治化され、脱領域化の衝撃にさらされる」と捉えることができる¹³⁾。つまりロバートソンには文化政治学が欠落しているということであろう。またミクロレベルでわれわれの身体を含めた文化の考察も欠如している。

「グローバリゼーションを引き起こすさまざまなプロセス」として彼は「資本主義の力学と帝国主義の諸力についての議論は、どうなるのか」と問題は出しているが、答えはない¹⁴⁾。このことは、彼のグローバル化の観念が、権力関係を欠いていることに関連している。そのため「全体図の中に第三世界の諸国を確実に導入しようという」¹⁵⁾ 意図を持っていたと言うにもかかわらず、この世界の不均衡性には目がむけられていない。われわれが目撃しているのは、国際的にも国内的にも新たな階層化と競争化という風景にはかならない。

グローバル化の政治経済を考える際に、ミッテルマンのアプローチは魅力的である。彼は、グローバル化とは、「単独の統一された現象ではなくて、諸過程と諸活動のシンδροームだということである」と述べ、「労働と権力のグローバルな分割(GDLP)、新リージョナリズム、抵抗の政治のあいだの相互作用なのである」と捉えている。GDLPは「グローバル政治経済の解剖学である。その構成部分は、世界の諸リージョン間の生産の空間的再組織化、リージョン間のおよびリージョン内の大規模な移住の流れ、生産過程と買い手・売

り手を結びつけるネットワークの複雑な網の目であり、これらの過程を媒介するトランスナショナルな文化構造の出現である」と述べている。「グローバル化は…マクロリージョナリズムや…サブリージョナルで国境を超えた制度とか…輸出加工地帯のようなミクロリージョナルなプロジェクトを通じて進行する」¹⁶⁾。

ここに述べられているように、グローバル化の過程は、資本とそれに対する〈抵抗の政治〉の相互作用の過程をも含む。しかし、多くの途上国は「大体において既存の国際システムを所与として受身の対応をとるしかない」と大野は述べている。彼は、それをベトナムと中央アジアについて報告している¹⁷⁾が、このような新たな国際的階層化を通じて／中でこの資本のネットワークは作動している。その結果グローバル化はリージョンの内・間の競争として現出している。われわれが目撃しているように、特にアジア地域では劇的な増加が起きているが、この変化は、先進国と途上国が工業製品と第一次産品を供給するという関係を大きく崩した。いまや、企業は資本と労働の最適な組み合わせを選択している。財の国際的流れでは非市場的な取引が増加している。ところが工業化が進む地域はある程度の経済制度が確立され、インフラも整備されているか、その政策が必要とされることに注目しておかなければならない。そのような条件を欠く地域はどうなるのか。グローバル化によって新たな勝者と敗者が出ることは多くの論者が指摘しているが、レトリカルな言い方をすれば、「第三世界」などはもうない。あるのは競争に巻き込まれ、勝利を得ようとする国家や地域だけである。

先進国においても途上国においてもその内部に敗者が輩出している。ミッテルマンもグローバル化によるいっそうの貧困化の分析を行っている¹⁸⁾。したがって、中心—半中心—周辺というモデルは無効になったとしても、階層序列がなくなったというわけではない。中心—周辺は地理的ではなく、社会的になったと言ってよい¹⁹⁾。「第三世界」は「第一世界」の内部にもある。部外者立ち入り禁止の、勝者用のゲート付きの住宅地(gated community)。隣接している敗者用のスラム街。ニューヨークなどの「グローバル・シティ」²⁰⁾はその典型であろう。その理論化として、マッシーは「場所を社会諸関係として考えれば…かつて周

縁にあったものがその(第一世界の都市の)中心に出現することを促すであろう」と述べている²¹⁾。先に述べたように、われわれが〈場〉を再検討しなければならないゆえんである。

グローバル化論のアプローチに関して、藤原帰一が9・11テロ後の国際状況を念頭に置きながら指摘したことは重要である。彼は、「グローバル化の分析は、市場における権力だけでなく、国際関

係における権力の分布と構成まで対象を広げなければならない」と言う。ここでは確かにグローバル化の語は用いられているが、軍事分野での権力分析不能のグローバル化論への批判は明確である。「国際関係における権力の分布と構成」はどのようにして可能なのか。彼の指摘するように「帝国」という概念を必要とするのか²²⁾。

(つづく)

注

- 1) John Gray(1998):*False Dawn:The delusions of Global Capitalism*, p.100. The New Press.
- 2) Paolini, *op.cit.*, p.142.
- 3) アルジュン・アパデュライ(門田 訳)(1990):「グローバル文化経済における乖離構造と差異」,『思想:グローバル化の文化地政学』, No.933, 12頁, 岩波書店.
- 4) David Harvey (2000):*The Spaces of Hope*, p.49, Edinburgh University Press.
- 5) 吉見俊哉(2002):「グローバル化と脱一配置される空間」,『思想:グローバル化の文化地政学』前掲, 60頁.
- 6) ジェームズ・H・ミッテルマン(田口 他訳)(2002):『グローバル化シンドローム』, 6-7頁, 法政大学出版局.
- 7) David Harvey (1989):*The Condition of Postmodernity*, Oxford.
- 8) ジョン・トムリンソン(片岡 訳)(2000):『グローバリゼーション』, 15-16頁, 青土社.
- 9) Anthony Giddens(1990):*The Consequences of Modernity*, ch. 1., 特に p.53, Polity Press. グローバル化とブレア政権の政策についての関連づけについては, Giddens(1998):*The Third Way ; The Renewal of the Social Democracy*, ch.5. Into the Global Age, Polity Press.
- 10) ロバートソン, 前掲, 5-9頁.
- 11) 同上, 10頁.
- 12) アパデュライ, 前掲.
- 13) 同上, 25頁.
- 14) ロバートソン, 前掲, 60頁.
- 15) 同上, 28頁.
- 16) ミッテルマン, 前掲, 5頁.
- 17) 大野健一(2001):『途上国のグローバリゼーション』, 12頁, 東洋経済新報社.
- 18) ミッテルマン, 前掲, 特に第5章.
- 19) Schori, ed., *op.cit.*, p.15.
- 20) Saskia Sassen(1998):*Globalization and Its Discontents*, The New Press.
マイケル・ハートは勝者・敗者というより, この事態を近代からポスト近代への移行, 外部の消滅, 近代的な公私の分離の消滅と捉え, そのことがもっている重要な帰結を, 近代の自由主義的な政治の占める場所が消滅したものと指摘している. 彼によると, われわれのポストモダンな社会は「政治的なものの欠損によって特徴付けられることになる. 実際, そこでは, 政治の場所が非=現働化されている」.(水嶋訳)(1998):「グローバルな管理社会」,『思想』, No. 914, 30-33頁, 岩波書店. 同趣旨の論文, (大脇訳)「市民社会の衰退」(『批評空間』II-21号). ハートの指摘については後に検討しなければならない.
- 21) ドリーン・マッシー(加藤 訳)(1993):「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」,『思想:グローバル化の文化地政学』前掲, 41頁. 彼女はハーヴェイ流の「時間—空間の圧縮」という概念を批判し, その概念の因果関係と社会的差異に注目すべきであると言う. 単なる「時間—空間の圧縮」ではなく, 「時間—空間の圧縮の権力の幾何学」(35頁)を提起する.
- 22) 藤原帰一(2002):『デモクラシーの帝国』, 19頁, 岩波書店.

(2002年11月25日受理)